



等求慈くんの鼻先 VOL.2 私の家族から考える 「最期の場所」



私が介護の仕事に就く原点は、家族にあるのかもしれないと、職に就いて何年か経ってから思うようになった。

私の母は一人娘だったので婿養子に父が入り、母の両親である祖父と祖父の両親である曾祖父父母が一緒に一つ屋根の下に暮らしていた。曾祖父父母の三人の娘である祖父の姉や妹も曾祖父母に会いに頻りに訪れていた。

薄い記憶だが、私が幼稚園の時に曾祖母が、自宅で老衰で80代で亡くなった。曾祖父父母の娘三人のうち一人は看護師、一人は医者妻であった。たぶん娘たちが来て、手厚い介護をしていたと思われる。

私が小学6年生の時に、祖母が60代で急死した。朝、朝食と一緒に食べていたのに、学校から帰ると亡くなっていた。私とよくケンカをした思い出のある祖母は、教職を定年退職したとたん、いくつもの病気になって自宅で療養していた。

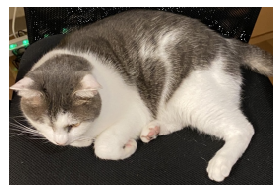
「ひいおじいちゃん、亡くなったよ」
私が高校生の時に、ある朝起きると

母から伝えられた。曾祖父は自宅で97歳で老衰で亡くなった。その時も曾祖父の三人の娘たちが詰めて看護・介護をしていたことを覚えている。

祖父は、私が20代半ばに大腸がんで亡くなったが、病院であった。

父は73歳で朝、風呂の中で息絶えていたところを母に発見された。早起きして、理科実験教室の準備の実験道具をこしらえてから風呂で亡くなっていった。父は循環器の疾患があった。「一生現役で、死にたい」と言っていたから本人は、本望だっただろう。

しかし、家族は寂しさが長く残った。



年表的に親族の死に場所を考えると、日本の看取りが在宅でなく病院へ徐々に移行し、その数値が逆転した時と重なってくる。

厚生労働省によると1951年は、自宅死が8割以上だが2016年は完全に逆転している。そして最近ではじわりじわりと施設死が増えて、病院死が減少してきている。しかし、病院死が8割近くあるのは先進国の中で日本だけで、フランスは6割以下、アメリカは4割程度、オランダは3割以下である。

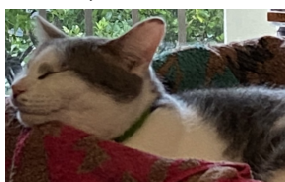
一方、日本人の意識調査では、希望す

る“最期を迎える場所”は半数近くが「自宅」と回答している。

最近、家族の形態や家族の関係性の変化もあるが、終末期のサポートは素人である家族が担うには大変なものがあると痛感する体験があった。

現在、私の母は、千葉の畑に囲まれた有料老人ホームで暮らしている。（経費はグループホームと同じか、安いくらい）。母は更年期から喘息を患っていたが、肺の状態が徐々に悪化して気管支拡張症となった。3〜4年前から肺炎を繰り返し、医療者でも痰吸引が困難な状態となった。自宅に訪問医療と訪問看護が入るようになったが、母と一緒に暮らしていた妹夫婦の介護の限界が来た。

母は施設に入ってから、妹から怒られることが無くなり、表情がリラックスして来た。妹は、母の事を思い「できることはやってみよう」ために様々な努力をしていたが、それが母にはストレスになっていたのでかもしれない。生まれてからずっと結婚式も全行ってきた家から離れたのに、家族が拍子抜けするくらい穏やかに施設で暮らしている。



還暦を迎えようとする私は、どんな最期を迎えたいのか、考え始めている。